

『学力に思う』

先月末に、令和4年度 全国学力・学習状況調査の結果が公表されました。この結果で、まず関心を寄せられるのが、平均正答率（正答数÷問題数×100の平均）という数値です。

今回、道内の平均正答率は小学校の3教科（国語・算数・理科）で全国平均との差が縮まる（2ポイント差）とともに、小学校の理科、中学校の国語と理科でほぼ全国平均並みとなり改善の傾向が見られると報道されました。この調査、2007年度から始まりましたが、しばらくの間、北海道は全国平均との差がかなりありました。以前は47都道府県の結果をランキングで報道されたりもし（ちなみに文部科学省は、ランキング形式での公表はしていません。報道機関が取材した結果を上位から並べていました）、北海道は長年最下位近辺で低迷していました。私も、調査結果に、一喜一憂しないように心がけてはありましたが、やはり結果が良ければ嬉しいもので、内心は「よしよし」と喜んでおりました。そして、どの学校も全国平均並みかそれ以上となることを教育活動の成果の目安の一つとしていたことは偽らざるところです。

ところで、「学力」という言葉は、ほぼ何の疑問もなく一般的に使われていますが、「その意味は？」と問われた時に、的確に答えられるでしょうか。おそらく、そして、最も分かりやすい意味として、「テスト（試験）の結果が学力の目安」と答えられる方は多いと想像しますし、私もそう思っています。根拠は、公平かつ客観的な情報だからです。

それは、「知識偏重では？」と異議が出るかもしれませんが、「では、テストに代わって、公平かつ客観的に評価できるものはありますか？」との問い返しに、おそらく明確な答えはなかなかないのでと思っています。

実は、現在のテスト、とりわけ、高校や大学の入試問題はよくできています。そして、全国学力・学習状況調査（以後、「全国学調」とします）の問題もとてもよくできています。ちなみに、全国学調はテストではありません。あくまで、学力の状況の調査であってその結果や分析を活用して授業改善等に役立てることが目的です。また、この結果が児童生徒の評価に反映されることはありません。当初は、A問題（基本的な知識を問う）とB問題（知識の活用を問う）の2種類の問題で構成されていました。とりわけ、B問題は、いわゆる応用問題で、かなり難度の高いものでした。令和元年度からは、これらを一体的に問う形式になり、どの設問も、思考力・判断力・表現力を問う様子が見られます。大人でも、おそらく苦労するのではと推測します。単に記憶の再生を求める問題はほとんどありません。どの設問も、問題文そのものが長文化（情報量が激増）しており、題意を捉えるまでに、かなり苦労します。そして、解答にたどり着くまでに、問題文を何度も読み直すことになります。

ですから、全国学調は、単なる知識量を見取るものではなく、かなりの高いレベルでの思考力等の状況を見取ることができます。したがって、その結果については、今そしてこれから求められる力（ざっくり言いますと「変化に主体的に対応する力」）がどの程度身に付いているのかの

目安の一つにして良いと思っています。

では、全国学調の結果が100%「学力」の状況と見なして良いのかと言えば、それは「否」となります。実は、日本では、「学校教育法」により、「学力の三要素」という内容で規定されています（2007年）。①基礎的・基本的な知識・技能の習得。②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等をはぐくむ。③主体的に学習に取り組む態度を養う。以上三つの要素を一体化したものを「学力」（文部科学省は「確かな学力」と称しています）としていますので、全国学調を受けた児童生徒の保護者への説明文には、「今回の結果は、学力の一部（一側面）です」という文言が入るわけです。

以上のことから、全国学調の結果は「学力の一部（一側面）」であることに異論は全くありませんが、それを軽視して良いとはなりません。私見ですが、全国学調の結果は、「児童生徒の人間としての総合力が滲み出たもの」と捉えています。

ということかと言いますと、全国学調で良好な結果が出た場合、それは、児童生徒に、体力、気力、主体性、自律的な態度、協調性、学びへの意欲など、生きていくための力がそれなりに充実していることを示しているのだと思うのです。加えて、将来の希望や目標を持っている（あるいは、明確ではないが、自分になりたいものやしたいことを考えている）。従って、このような状態にある児童生徒は、「人間としての総合力がそれなりに高い」と捉えています。

では、「人間としての総合力」を向上させるためには、どのようにすればいいのか。随分と大きな話になってしまいましたが、次にいくつか私見を述べます。まあ、そんな考えもあるよね程度でご理解ください。

1 学校が安心できる場であること。2 日々の授業が、そこそこ良質であること（素晴らしい授業であることに越したことはないのですが、「そこそこ良質」を最低基準と考えます。そして、その前提条件として、教師と子どもとの間に良好な人間関係があり、「わかる・できる」があること。このような授業を積み重ねていくことで質が向上していくと考えます）。3 家で過ごす方を工夫する。帰宅してから就寝までの時間をどう過ごすかを工夫する。そこに適切な学習の時間を必ず設定する。このことについては、すでに学校は手立てを講じていると思いますが、最後は保護者の在り方が大きく影響します。子どもとの話し合い（会話）を大事にし、それを積み重ねていくことで、自主的・自律的な過ごし方ができると考えますし、望ましい生活習慣の形成につながります。ここのところが、実は、とても大きいと思っています。建物を支える「基礎」や「土台」に当たると押さえています。4 簡単なことではないとは思いますが、将来の希望とか目標とかを持てるように導く。何をきっかけに、将来の希望や目標を自覚するのかはわかりませんが、少なくとも、まわりの大人は、その芽（あるいは兆し）が出てきた時には、機を逃さずちゃんと話し合うことが大事です。

人間の本質として、「知るは楽し」「認められれば嬉し」ではないかと思っています。これらの実感を持てると、人生に、「生きがい」や「やりがい」が生まれるのかなと思いますし、「学び」に対して勢いもつくのかなと思っています。